

Title	民族學と福澤先生
Sub Title	Léon de Rosny and YUKICHI FUKUZAWA
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1950
Jtitle	史学 Vol.24, No.2/3 (1950. 10) ,p.43(175)- 65(197)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	福澤諭吉五十年忌記念
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19501000-0043">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19501000-0043</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 民族學と福澤先生

松 本 信 廣

一

福澤先生が、文久元年十二月、徳川幕府の第一回遣歐使節に翻譯方として隨行し、巴里に於て佛人東洋學者レオン・ド・ロニイと知り合ひ、屢その訪問を受けて日本の事情を教え、又その案内によつて巴里の學術設備を見、一行の歐洲周遊中ロニイは佛政府より派遣せられて之に隨伴したることなどは、先生の自傳及び「西航記」中に見え、世人の知るところである。然し先生が此時ロニイにより、パリーの一學會の正會員に推舉せられしことに就ては、先生自身歸來之に就て語られることなかつた爲世に全く知られなかつたのである。所が最近福澤家の貴重資料が本塾に寄贈される所となり、その中此事に關する一文書がたまたま整理中の昆野和七氏の發見する所となり、本年五月十日より十八日まで三越に開催された展覽會に出陳せられ、始めて天下の視聽を惹いたのである。

該文書は、縦二七・二糶横三六・一糶で上質紙に石版で印刷されたものであり、會名は裝飾文字により、その他の文字は普通の書體で印刷せられ、氏名だけが書き入れる様になり、周圍を青い、四隅を模様化した罫線によつて取圍んだ

會員證書である。左に原文と譯文とを掲げる。

(イタリックが手寫された部分である)

Société d'Ethnographie Américaine & Orientale

Approuvée par décision de S. E. le Ministre de l'Instruction publique.

La Société sur la proposition de M. M. Ch. de Labarthe et Léon de Rosny et sur le rapport de la commission du Conseil ayant nommé Monsieur Foukou Sawa membre titulaire nous lui avons délivré le present diplôme.

Fait à Paris, le 7 octobre 1862

Le Président du Conseil, *Prince Michel Vlangali-Handjari*

Les Vice-Présidents de la Société,

*Eichhoff, Jomard, Becorman, S. Aubin, A. Chodzko, Alfred Maury*

Le Président de la Société, *Le Baron de Bourgoing*

Le Trésorier, *par interim J. Oppert*

Le Secrétaire adjoint, *E. Beauvois*

Le Secrétaire perpétuel, *Léon de Rosny*

同譯文

文部大臣閣下公認

アメリカ及び東洋民族誌學會

本會は、シャール・ド・ラバルト及びレオン・ド・ロニイ諸氏の推薦及び評議會委員の報告に基き、福澤氏を正會員に任命し、本證書を授與せり

一八六二年（文久二年）十月七日 パリーに於て

評議會議長 ミケル・ヴランガリ・ハンジェリ公

副 會 頭 エーコフ、ジヨマル、ベツコルモー、エス・オーバン、アー・コヅコ、アルフレド・モーリイ

會 頭 ド・ブルゴアン男

出納係代理 ジェー・オッペル

副 幹 事 エー・ボーヴォア

常任幹事 レオン・ド・ロニイ

證書の右下隅に會印を押し、また左下隅に鷲が蛇をくわえた姿を天空に表はし、その下に旭日と海と陸とを畫き、上に「民族誌學會」下に「一八五九年創設」と印刷した會票を貼付してある。

さて本證書が、如何にして福澤先生に授與せられるに至つたか？一體民族學は、十八世紀の啓蒙時代にフランスの人文主義的精神が生んだ學問であり、一八三九年（天保十年）に巴里民族學會 *La Société ethnologique de Paris* が始めてフランスに生れ、民族學 *Ethnologie* と云ふ名がつくられ、一八四三年（天保十四年）英國に其影響が及んで英國民族學會 *English Ethnological Society* が成立した。巴里の民族學會は、一八四八年（嘉永元年）に斷絶したが、一八五九年（安政六年）に此アメリカ及び東洋民族誌學會が、巴里に組織せられたのである。最初「東洋及びアメリカ雜誌」

Revue Orientale et Américaine を發行し、後に之を「民族誌學會紀要」Mémoires de la Société d'Ethnographie と改稱した。その外にまた「民族誌學會々報」Actes de la Société d'Ethnographie 及び「民族誌學會年報」Annuaire de la Société d'Ethnographie を發行し、また「人種寫真集」Collection Ethnographique Photographiée を編纂發行してゐる。學會雜誌が研究の目的として銘うつてゐる所は、理論民族誌 Ethnographie théorique 記述民族誌 Ethnographie descriptive 民族學 Ethnologie 民族起源及び移動論 Ethnogenie 人類學 Anthropologie 生理學 Physiologie 古生物學 Paléontologie 比較宗教 Religions comparées 言語學 Linguistique 心理學及び形而上學 Métaphysique 博物學 Histoire naturelle と云ふ廣範圍であるが、此會の關係者は、大體文獻を主とした記述民族誌を究めんとすることを目的としてゐる。此會の雜誌が早く幕末の我國に舶載せられてゐたことは、幕府の蕃書取調所の藏書を藏する静岡縣立圖書館葵文庫の「貴重洋書目録」中佛書地理の部に次の書目が見ゆることによつて知られる。

Revue Orientale et Américaine, Léon de Rosny, Tome 10, Paris, 1864. Revue Orientale et Américaine, publiée sous la auspices de la Société d'Ethnographie. No. 54, Paris, 1861. No. 46, Paris 1862. No. 56, Paris 1865. Annuaire de la Société d'Ethnographie, L. de Rosny et Ch. de Labarthe, Paris 1860—1864. Annuaire de la Société d'Ethnographie, Ch. de Labarthe, Paris 1862.

福澤先生に授與せられた證書には、當時の役員の名が列記してあるが、之は名だたる東洋學者、民族學者、貴族等を含んでゐる。ロニイと共に福澤氏を推薦したシャル・ド・ラバルトと云ふ人物は、古代アメリカ及び民族誌の研究者であり、インカ、メキシコ古代文明、民族誌に關する著書多く、一八六〇年（萬延元年）に成立した東洋學會 Athénée

Orientale の幹事役をつとめてをる。<sup>(1)</sup> (一八七一年歿) また評議會議長のヴランガリ・ハンジェリ公當人については委しいことは知られないが、その先代は、言語學者で一七六〇年トルコに生れ、「佛・アラビア・ペルシア・トルコ語字典」三冊を著してをる。(一八五四年歿) 副會頭のフレデリク・グスターヴ・エーコフも、言語學者で、一七九九年アーヴルに生れ、梵語その他東方語を學び、一八三六年に「歐洲諸語と印度諸語との比較」を著し、一八四七年には學士院文學部の名譽會員におされ、一八五五年には、フランスの高等學校<sup>リセ</sup>に於ける現代語教育の總監督に任ぜられてをる。(一八七五年歿) 同じくジョマル<sup>(2)</sup>は、學士院の會員で民族諸學會の樞要な位置を占めてをる。同じくアレキサンデル・コスコは、ペルシア研究者で一八〇四年ポーランドに生れ、一八二九年より一八四一年までペルシアに在留し、領事と通譯とをなし、次いでフランスに滞留し、ペルシアに關する諸著書を公刊し、コレツヂ・ド・フランスに斯拉ヴ語及び文學の教授となつた。(一八九一年歿) 同じくルイ・フェルディナンド・アルフレッド・モーリイは、古代學研究者で一八一七年にモー Meaux に生れ、一八五七年に學藝院の會員と選ばれ、その多くの著書の中、著名なのは「古代ギリシア宗教史」三卷(一八五七年)である。(一八九二年歿) 會頭のシャルル・ポール・アマブル・ド・ブルゴアン男は、スペイン大使でかつ文士として著名なジャン・フランソアの子息であり、一七九一年ハンブルグに生れ、一八三二年サクソニーの大使となり、一八五三年元老院議員となつた著名な外交官兼政治家である。(一八六五年歿) 出納係代理のジュル、オッペルは有名な、アッシリア學者で一八二五年ユダヤ系のドイツ人としてハンブルグで生れ、アラビア語梵語等を學び、フランスに歸化し、フレネル、トーマと共に佛國政府により一八五一年メソポタミアに學術調査の爲派遣せられ、一八五七年以來その報告を刊行した。彼は楔形文字の解讀者として知られ、「カルデア・アッシリア史」「梵語文法」等の著

書がある。(一九〇五年歿) 副幹事のイー・ボーヴォアに就て委しいことは不明であるが一八五九年に「十世紀十三世紀アメリカに於けるスカンディナビア人の發見」と云ふ著書を出版してをる。最後に常任幹事のレオン・ド・ロニイは、一八三七年八月五日ロオスに生れ、初めアドリアン・ド・ジュシウの指導の下に植物學を研究してゐたが、數年後コレツヂ・ド・フランスに於てスタンニスラス・ジュリアンの講筵に侍し、古代支那語を學び、次いで獨學で日本語を學び、一八六二年には政府から通譯として日本遣歐使節に隨行を命ぜられた。翌年東洋語學校に日本語講師となり、一八六八年日本語講座開設せられるやその初代教授となり、一八八六年には高等研究院に於て副指導講師となり、佛敎及び極東の其他の宗教に就て講義した。極東の事物の外にアメリカ研究にも關心を持つてをる。一八五九年には民族誌學會を創設し一八七三年には初めて東洋學者國際會議をパリに催す當事者となり、その初代会頭として活躍した。日本シナ其他諸民族に關する著書論文頗る多く、殊に日本文化の愛好者として有名である。彼は漢籍から漢字を學び、ついで日本語にはいつたので比較的是いりやすかつたと云ふものの一回も日本に來らず、しかも日本語を多少なりとも解し得るに至つたのであるからその努力はなみなならぬものがあつたと云へる。(一九一四年歿)

大體此證書の署名人は、當代の名だたる東洋學者、民族學者、古代學研究者、及び之に興味を持つた著名な貴族顯官であり、此等の有名人を役員としたこの「アメリカ及び東洋民族諸學會」の性格も之によつて推察せられる譯である。

## 二

福澤先生は、文久二年三月九日巴里に着し、四月一日まで滞在し、ついで英・蘭・普・露を周遊して八月二十九日に

巴里に歸り、同八月十二日に巴里を發し、ロシフォルトで乗船し、ポルトガルを経て歸國の途に着いてをる。その間「西航記」によると

三月十九日パリーの條に、

佛蘭西の人口ニなる者あり支那語を學び又よく日本語を言ふ時に旅館に來り談話時を移す本日語次魯西亞のことに及びロニ云去年魯西亞の軍艦對馬に至り既に其全嶋を取れりと聞けり信なりやと余其浮説なることを説辨せしに翌日新聞紙を持來り昨日の話魯西亞の對馬を取りたるは全く虚説なることを此紙に記して世上に布告したりと云へり

同二十八日の條に

ロニと共に禽獸草木園に行く○園のことは別冊に詳也

七月二十二日露都の條に

佛蘭西の羅尼<sup>ロニ</sup>來る此人は日本語を解し又能く英語に通ず日本使節巴里に在りしときより時々旅館に來り余輩と談話せり使節荷蘭へ逗留中羅尼政府の命を受け日本人を見る爲めハーゲに來り留ること二十日許母の病を聞き巴理に歸り今度又日本人を尋んとして別林に來りしに余輩既に同所を出立せり由て又別林より伯德祿堡に來れり別林より伯德祿堡までの道程八百里火輪車にて此鐵路を來るに入費四百フランク唯日本人を見ん爲め來る歐羅巴の一奇士と謂ふべし  
午後植物園に行く

閏八月三日パリの條に

羅尼と共に書庫を觀る巴里に書庫七所あり今日所見は最大なるものなり書籍百五十萬卷此書を一列に并るときは長



さ七里(佛里法)なるべしと云○學校に行く校の名をインスチチュエデフランスと云此學校は小童の爲め設るものにあらず老先生の集合する所なり社中四十人ありて其員を増すべからず若し缺員あれば歐羅巴にて最有名なる老先生を擧て之を補ふ此社中に入るは歐羅巴にて最も難きことにて既に其員に加るときは世人に尊敬せらるゝこと朝廷の宰相の如し第一世ナポレオン帝は此社中たり今の佛蘭西帝も社中に入らんことを望めども之を許さずと云○インスチチュエの學五科に分る第一語學第二歴史第三術學第四政學及理學第五技學諸先生毎日こゝに會して一科を講論す學者之を聽んと欲するものは來るを許す

之によるとロニイが絶えず一行に觸接し、それから見聞を得んとし、その中でも俊敏な福澤先生と交渉の深かつたことが知られる。一體外國に行き、外國人と交際することは今日に於てこそ尋常茶飯事であるが當時は中々そう簡單にはゆかなかつた。福翁自傳に次の如く述べてゐる。

日本は其時丸で鎖國の世の中で、外國に居ながら兎角外國人に遇ふことを止めやうとするのが可笑しい。使節は竹内、松平、京極の三使節、その中の京極は御目付と云ふ役目で、ソレには相應の屬官が幾人も附て居る。ソレが一切の同行人を目ッ張子で見居るので、なか／＼外國人に遇ふことが六かしい。同行者は何れも幕府の役人連で、其中に先づ同志同感、互に目的を共にすると云ふのは箕作秋坪と松木弘安と私と、此三人は年來の學友で互に往來して居たので、彼方に居ても此三人だけは自然別なものにならぬ、何でも有らん限りの物を見やうと計りして居る。ソレが役人連の目に面白くないと見え、殊に三人とも陪臣で、然かも洋書を読むと云ふから中々油斷をしない。何か見物に出掛けやうとすると必ず御目付方の下役が附いて行かなければならぬと云ふ御定まりで、始終附て廻る。此方は固よ

り密賣しやうではなし、國の秘密を洩らす氣遣ひもないが。妙な役人が附て來れば只蒼蠅い。蒼蠅いのはマダ宜いが、其下役が何か外に差支があると、私共も出ることが出来ない。ソレは甚だ不自由でした。私は其時に——是れはまあ何の事はない、日本の鎖國を其まゝ擔いで來て、歐羅巴各國を巡回するやうなものだと云て、三人で笑たことがあります。(福翁自傳「岩波文庫版」、一七〇—一七一頁)

とある位であるから、ロニイと往來することさへ色目鏡をもつてみられてゐたと察せられる。先生が平素の襟懷を「植て見よ花のそだたぬ里はなし、こゝろからこそ身はいやしけれ」と云ふ古歌に託し、之に署名してロニイに與えたのは此間のことであり、ロニイは、之をその日本文集 *Recueil de texts japonais, Paris, 1863* の中に近代和歌の標本として印刻してをる。

ロニイと福澤先生との交渉に關する重要な資料は、最近發見せられた先生の「滯歐手帳」であり、之に就ては野村兼太郎教授の「福澤先生とレオン・ド・ロニイ」(福澤研究四、昭和二十五年)が發表されてをる。之によると手帳には主として閏八月に於けるロニイとの會話のメモが記載され、ロニイの宛名が本人によつて自署されてをり、出發前夜まで兩人の對談は盡きる所を知らなかつたやうである。<sup>(4)</sup>

福澤先生が、當時の我國新知識を代表する俊才であつたことは云ふを待たないがその興味の焦點は、經世安民の實學に存し、人類民族の文化の如き諸問題は、當面の關心事であつたとは考へられない。しからば先生が何故に民族誌學會の正會員となつたのであるか？ 恐らく先生と肝膽相照したロニイが、その友情を記念し、先生から多くの知識を提供せられしことに對する感謝の微意を含め、氏の主宰してゐる民族誌學會の一員に推薦することをその僚友達に諮り、こ

の「證書」を作製して先生に送つたものであらう。證書の發行された年月は、陽曆で十月七日であり、陰曆になほすと閏八月十四日先生一行のパリ出發後二日にあたる。然し一行は、なほポルトガル訪問をなさねばならなかつたのであるから郵送すれば後から充分間にあふた筈である。

福澤先生がロニイと共に見學した禽獸草木園は、今日 *Museum d'Histoire Naturelle* と云はれてゐるもので *Jardin botanique, Ménagerie, Galerie de Zoologie, Galerie de Géologie et de Minéralogie, Galerie d'Anatomie, de Paléontologie et d'Anthropologie* 等から成つてゐる。此等の陳列館の中興味あるのは人類學の陳列館ギヤラリーであり、主に諸人種の頭骨が陳列してあり、その右側二階の隅に文久二年の日本使節一行の一人一人の全身寫眞が回轉式に陳列してある。その中に下位のオフェイスエ土の一人として福澤先生らしき寫眞あり、その名は *Sukasawa* とあるが、當時一行中に同名のものなく、Sの花文字はFのそれと間違ひやすく、之は恐らく福澤先生の肖像ではあるまいかと思はれる。興味あることはこの福澤先生と覺しき肖像を民族學者のデニカーがその *Les Races et les Peuples de la Terre*, Paris, 1900, 2e éd., 1926, p. 90 English ed., *The Races of Man*, London, 1900, p. 70. の中に上半身だけ轉載し、(舊制度治下の)日本の士、東京生れ、顔長き型の例、*巴里自然博物館寫眞*) *officier japonais (ancien regime), né à Tokyo, Exemple de face allongée (photo Muséum Hist. Nat., Paris)* と説明してゐる事である。デニカーはベルツの觀察により日本人を優秀型と下司型とに分ち、福澤先生らしき寫眞を前者、主として支配階級の間に見られる背高く頭比較的長く、顔立ち細長く、眼が水平で鼻の眞直ぐな型の標本として挙げたのである。デニカーの書は、古いけれども個人の書いた概括的な通俗書として今日もなほ聲價を失はない。彼はこの博物館圖書部の司書たりし人であり、その資料として陳列館

の寫真を利用するのに便宜を得てゐたことであらう。<sup>(5)</sup>

三

ロニイは、その後政府の受けが悪くなつたやうで、元治元年第二回の幕府の遣歐使節が來た時は前回の如く活躍出來なかつた。即ち第二回の使節たる池田・河津・河田三使の復命書の中に次の如く見ゆる。

「佛人こと羅尼と申もの先御使之ものより懇切之待遇を蒙り候由に而専ら御國之御爲め乍蔭周旋等いたし却而當時其本國政府之首尾を損し私共巴里滯在中には日本人に接見之儀政府より被差止候もの様に有之

羅尼儀は巴里都府に罷在一介書生に而東洋學執心に有之家産寒貧老母奉養之暇讀書三昧他志無之勉強いたし候趣に而英佛學は勿論支那學も相應に出來唐音に而意味相通し御國學は専ら研業中に而已に寒暄一と通り之儀は語言相通し文書上は大概之意味は相分り此節日本神代記等取調候よし従前より日本之儀は別而愛戀いたし候様子に相聞夫故政府より接見等忌候事とも被存候

確然自立之御基本相立富強之事業被爲計候には取善採長之事第一要點に有之同人抔も一廉之御用可相成とも被存候其餘「御國御用相勤度旨書簡を以申出又は手蔓等に而申出候ものも有之以後御都合にも可相成哉 被存候又は夫々程能挨拶仕度候事に御座候」

更に慶應元年（一八六五）幕府は、レオン・ロツシユの斡旋により、横須賀に製鐵所を設立せんとし、柴田日向守一行を英佛に派遣してをる。その時通辭として再度渡歐した福地源一郎が、ロニイに就て佛語を學んでをる。即ち「懷往

事談」に氏が國際法を學ばんとして佛語を先づ學べと云はれた經緯が左の如く記してある。

扱て巴里にてウエルニーに頼み其紹介にて二三の國法學者に調して教を乞はんと試みたりしに彼學者先生は快く承諾しさればとて課程時刻を定め愈々其教を受け掛て見たれば、余は先生が（假令英語には御互に十分に通達せざるにもせよ）其法律沙汰の解し難きに辟易し、彼先生も亦余が法律沙汰には全く無智無識なるには驚愕して講義も説明も手の着かた無に困難したり、其困難の末が到底尋常の法理及び國際上の歴史さへ知らずして、萬國公法修行などとは思ひも寄らざる目的なり依て先づ一通り國際に關係ある歴史を學ぶべし尋常一と通りの法律を學ぶべし其爲には英語にては不便なるが上に外交の用語は佛語なれば先づ佛語の稽古より初め玉ふべしとの引導を被つたり、此引導は甲の先生のみならず乙丙丁と紹介せられたる諸先生が異口同音の説諭にてウエルニーさへも遂に同様の忠告を與へたれば憐むべし外國方の一少年才子と云はれたる福地源一郎が我こそは此行にて萬國公法の秘奥を學び歸朝の上は雄辯を振ひ草説を述べ外國の公使等を俎豆禮讓の間に論析して彼が僭横傲慢を挫きて其膽を奪ひ其の心を寒からしめ以て日本を九縣大呂の重に安ぜんなれと思ひ込たる雄志大望は僅か數日間の試験にて忽に泡沫となり轉一轉して佛語生徒と相成たれば是よりロニーと云へる東洋僻の奇論士を頼みて佛語の稽古に従事したり、去れば余が此時の隨行は其結果が英佛再度の見物と佛語修行とに止まつたりき、然れども佛語を少し學び得たると外國の事情を聊か知り得たるは此行の利益なれば猶已むには勝つたりき云々。

福地氏は、閏七月十七日巴里に着き、十月二十一日ロンドンに赴き、十一月一旦パリに歸り、十二月三日同地を發し、歸國についてをる。従つてロニーとの交遊はごく短い間であつた譯であるが、今日同家に福澤先生に授與せられた

と同様な民族誌學會の正會員證書が藏せられてあり、これについて鳥居龍藏博士が「人類學と福地源一郎先生」(新舊時代第一年第四冊、大正十四年五月)を發表せられ、次の如く述べてをる。

「この會員證のなかに Foukou-tsi Chen tsi-ro と名前が入られてゐることは最も日本にとつて名譽のことであらうと思ふ。福地氏は慶應二年に柴田日向守と共に歸つた。一體當時の學會が福地氏を入會さしたと云ふことは、一は東邦人種學の研究と云ふものに向つて、福地氏をうながして日本及びその周圍の研究をなさしめやうとしたのであらう。然るに福地氏は日本に歸つて以來は、その會の會員として實を示したか否やと云ふことは予はこれを知らない。(中略)これは恐らくは同氏は歸朝後は人種學會員の實を示さなかつたのは、畢竟、氏の位置、環境から、知らず知らず他の方面に轉じて仕舞つたものであらうと思ふ。もしも同氏にして歸朝してから以後に、この學問についてよし關係しなかつたとしても、彼地の人類學者の群と往來してをられたなら人種學・人類學と云ふものは既に明治の初年に於いてその發芽を見るに至つて居たのであらう。殊に同氏は當時の世界的の學者の群と往來してをつたと思ふ。實に今から考へると惜しいことに思はれる。しかし當時氏は巴里の人種學會のメンバーとなつてゐると云ふことは、日本のため至極名譽のことゝ云はなければならぬ。日本の人種學・人類學の上に注意すべきは當時福澤諭吉氏のアングロサクソンの歴史・地理・政治が盛んに唱へられてゐるうちに、福地氏が佛蘭西の人種・地理・歴史に關係してをられるのは、非常に面白いことと思はれるのである云々。」

福地氏の會員證は、福澤氏のそれと全く同様であり、たゞ推薦者にロニイと共にエルヴェイ・ド・サン・ドニイ侯 Le Marquis d'Hervey de St. Denys が當り、評議會議長がジヨマルであり、副會頭からはジヨマル、ベコルモーが

抜け、四人となり、出納掛にオッペルの代りにヤッサント・ド・シャランセイ Hyac. de Charency の名が見える。エルヴェイ・ド・サン・ドニイが著名な支那學者であり、一八七四年コレツヂ・ド・フランスの支那語の教授、一八七八年學士院文學部門の會員となり、馬端臨、文献通考四裔考<sup>(9)</sup>の佛譯をもつて知られてをすることは云ふまでもない。(1823—1892)

シャランセイには

*De la parenté du japonais avec les idiomes tartares et américains*, Paris, 1858. *Le Deluge et les livres bibliques* Paris, 1858. *Éléments de la grammaire Hottentote (dialecte Nama)*, Paris, 1860.

等の著がある。

福澤、福地の兩氏共に此會員證に就て歸來口外せられなかつたのは何の爲めであつたらうか。恐らく攘夷思想の強い當時のことであり、みだりに外人と親交を結び、その結社の一員になつたと云ふことが、つまらぬ誤解を招くことを恐れる理由が多分に存したに違ひない。また當時陪臣にして翻譯方と云ふ最下位の身分にあつた先生が、上司を度外視し、自分だけ學會のメンバーに選ばれる名譽を得たことを發表することが如何に不利であるかも充分知悉せられてゐたに違ひない。とりわけ現實の問題の爲寧日なかつた當年の福澤先生にとつて文化史的民族誌學的な方面に手をつけ、ロニイと音信を續けるの余裕がなかつたことが察せられ、ロニイとの巴里に於ける會談が、後年の西洋事情の資料の一部とはなつたものの、ロニイの先生におくつた會員證書はその儘篋底にうづもれて今日に至つたのであり、その點は福地氏の場合も同様であつたのではあるまいか。

然しながらなんにいたせ當時の遣歐使節の一行は、我國人の幕末最初の渡歐であり、草鞋千足を用意して處分に困つたと云ふ類の珍聞奇談續出し、歐洲の人士は、チベットやアフリカの秘密境から來た奇異なる人種の如く之を迎え、觀察してゐた中に、福澤先生の如き傑出した人士<sup>6</sup>あり、よく歐羅巴の學者と伍してその眞價が認められ、滯留短時日にして當時歐洲一流の學會の正會員に選ばれたと云ふことは幕末我國學問の水準をはかり得る事實として特筆すべきことであらう。また極東より渡來した異邦の青年學徒を直ちにその學會の正會員に迎え入れる雅量を示した當時のフランス東洋學者達のヒューマニズム的な精神に就ても注目すべきものがある。

#### 四

ロニーの性格に就て比較的委しく述べてをるのは慶應三年（一八六七）萬國博覽會開催の際パリに派遣せられてゐた栗本鋤雲の「曉窓追録」である。

予嘗て笑ふ、書生の漢籍を好む者常に支那を尊尙し、雅致風韻ありとし、洋書を讀む者常に歐羅巴を主張し、開國文明なりとし、共に甚しきに至りては飲食衣服の末に至りても、各々其の好む所に従ひ強ひて夫に模倣せんことを欲する者あるを。然るに久しく巴里に在りて、彼の國の我國を好む者も亦甚だ我俗を景慕し、我飲食衣服を好むを見て始めて天下の通情非笑すべからざるを悟れり。今此に其の一二を擧げん。岡士フロリヘラルト、學士ロニー共に我國に航來せる者に非らず。然れどもフロリヘラルトは我國の岡士日尼拉爾コンスゼネラルに任ぜられ、ロニーは我國の書を讀む者にして、共に我國に因みあり、故に皆強く我國を主張し、若し謗る者ある時は怫然の色言面に表わるのみならず、平常の嗜好も亦略々



我に模倣せんとせり。凡そ洋人の洋茶を喫する、必らず糖を點じ然る後始めて咽に下る。今此の二人甚だ我の茶を好み、常に糖を加へず。又時に抹茶を嚙む、聊かも矯飾に出でず。ロニーに至りては洋烟を喫せず、我が煙草を喫し、煙管、煙草入れ凡て我が邦製を佩せり。

ロニーは歳二十余、一個の奇書生なり。家至つて貧なれども、産を治めず、母に事へ頗る孝なり。唯性議論を好み、善く人を誹謗す、故に人甚だ是を貴ばず。然れども善く我が國の史書を讀み、能く我が國の事蹟を記す。日本史、日本紀、日本外史の類、瀏覽遺こす無く、旁ら雜書に及べり。現今巴里に於て日本學校の教頭を命ぜられ、徒弟頗る多し。屢々予の館を訪ひ、通常言語は故さらに譯者を謝し對話す、但し談音佶屈、且つ助詞を解せざるを以つて、十中纔かに三四を諦聽せり。

ロニーは鉛筆を以つて我の字を書す。字格端正にして且つ頗る速かなり。自ら姓名を譯し、羅尼と書す。曾つて人の囑を受け、我國桑蠶耕織の書を佛譯し、又彼國新聞紙を和譯し、共に予に示せり。(栗本鋤雲遺稿六八一七〇頁、昭和十八年) 此一文はロニーの奇癖をよく物語つてをる。

なほ成島柳北の「航西日乗」在巴里明治六年(一八七三)二月二十日の條にも

「原田氏來り誘シロニー氏ヲ訪フ。氏ノ家ハポトクウルセル郭門外ニ在リ。氏藏書數十卷ヲ出タシ余ニ示ス。余原田子ト共ニ同氏ノ人種論新著書ノ會社ニ加入セリ。」

とあり、三月十一日の條には、

「小野、石川<sup>分</sup>二子トロニー氏ヲ訪ヒ其ノ社ニ入り金ヲ附シ、證書ヲ受取ル。該家ニテ波蘭人ロバロア氏ニ會フ。氏ハ

日本ニ航スルノ志アリ。主人待遇極メテ渥シ。印度字ノ疑義數項ヲ質問シ、又社中ノ種字局ヲ巡覽シテ歸ル。(明治文化全集、十六卷、四二三、四二五頁)とある。

此處に云ふ「人種論新著書の會社」は、蛭原八郎氏の指摘せられた如く「民族誌學會」の事であり、之によると福澤・福地兩氏に授けたと同様の會員證書を、ロニイは、明治六年成島柳北及び原田吾一の兩氏にも授けたらしい。「世のうはさ」解題レオン・ド・ロニイ傳(蛭原八郎)一八一—一九頁、昭和九年、明治文化研究會編

ロニイの得意の絶頂であつたのは、恐らく此年東洋學者の會議をパリに開催し、自ら會頭に選ばれた際であつたらう。彼は、此會議の趣意を日本文に譯し、日本に送つたらしく、同年九月十九日發行「郵便報知新聞」第四百十三號紙上に左の如く出てをる。(世のうはさ、前引論文、二十五・六頁)

#### 東洋學公會

##### 第一會議

紀元一千八百七十三年第七月二十二日  
巴里斯府ニ於テ日本學術并開化ノ議

日本開港以來内外益ヲ更へ、彼此互ニ情ヲ通ジ、從テ學術ヲ講求セシヨリ、遂ニ即今此公議ヲ起スニ至レリ。故ニ予等日本學術ニ志シ又彼ノ開化ニ着眼スル諸君子ノ、此公會ニ臨レンコトヲ忝フス。

初メ此公會ノ說ヲ起セシガ、幸ニ四方ノ君子之レニ應セラレテ、今實ニ此會ヲ起スコトヲ決セリ。予等預メ議事ノ箇條ト議員ノ姓名ヲ記シ、之ヲ同志ノ君子ニ送ル。若シ四方ノ君子議問ノ箇條アラバ、速ニ記シテ之ヲ予等ニ送ラルベシ。茲ニ數箇條アリ、同志ノ君子之ヲ可トシ給ハム、他日之ヲ議問ノ箇條ト定ムベシ。即チ

第一問 西洋文字ヲ以テ日本語ヲ書スルニ一定ノ法ヲ立ル事。

第二問 日本ト西洋ト開化ノ比較。

第三問 日本ト西洋ト學術ノ比較。

第四問 日本學術ト西洋學術ト彼互ニ相補助トスル事。

日本人若シ此會議ニ志アル人ハ、左ニ記スル處ニ來リ之ヲ乞フベシ。其價十二「フランク」ト定ム。右十二「フランク」ヲ拂ヘバ直ニ會議人員ノ證書ヲ與ヘ、又會議終ルノ後凡テ議問決議ノ諸書ヲ與フベシ。

東學校大博士

羅尼

大學校大博士

奧伯兒

大畫工

日林

建築隊大尉

勒法魯亞

蛭原氏は「奧伯兒、日林、勒法魯亞は不幸にして如何なる人物か知ることが出来ない。いづれは折を見て、斯ういふ人達のこととも調べてみたいと思つてゐる」と書かれてゐるが奧伯兒は、Oppert 日林は、De Zelinski 勒法魯亞 Le Vallois を指すのであらう。オッペルが、ドイツ人でアッシリア學者であることは前述したが、ド・ゼリンスキイはロシア人で東洋語學校で、日本語支那語を學んでをり、會議には日本人の色彩名に關して研究を發表してをる。レヴロアは工兵大尉 *Capitaine de Génie* で矢張り東洋語學校で日本語を學んでをり成島氏の記文に見ゆるロバロアに該當するらし。

ロニイの晩年はあまりかんばしくない。フランスの日本學もクロード・メイトル、ノエル・ペリの如き錚々たる學者

が、現れて來たのでロニイの日本語に關する著書も此等の人々の遠慮假借もない批判をあびなければならなかつた。日本學の創設者の一人として荆棘の道を開く勞苦をとつたものの實際の建設は、之を他の後進俊秀に譲らねばならなかつたのである。ロニイの著書を散々に酷評した佛のクロード・メートルは、その同じ雑誌に奇しくもまた福澤先生に觸れてゐるのである。即ち福澤先生が、一九〇一年に歿せられ、その追悼傳記として宮森麻太郎氏が *A Life of Mr. Yukichi Fukuzawa, 1902* を著はされた際、彼は、*Bulletin de l'Ecole Française d'Extrême-Orient*, II, p. 299—301. に於て之を批評し、福澤先生のことを「伊藤・大隈・井上等の人物より歐羅巴に知られること遙かに少い」が、「彼の日本の改革に當つて演じた役割は恐らくより重要なものであつた」と斷じ、「彼程當代の人間の理想を正確に表現し、同時に之に對しこれ位深奥な影響を及ぼした文人を外に求むれば恐らくヴォルテールにまで遡らねばならないであらう」と云つてをる。福澤先生の眞價は、今日に於て我國に於ても漸く適當に評價せられた觀があるが、しかし十九世紀末尾及び廿世紀初頭のフランスの二人の日本學者により逸早く適切に認識せられてゐたことを吾人は記憶すべきである。<sup>(8)</sup>

(福澤先生及びその門下の人類學及び民族學に關する寄與に就ては之を又の機會に考究してみたい。)

なほこのついでにロニイの著書論文の中本塾に藏する書名を左に掲げて置く。この中四十種は市河三喜博士の蒐集した本塾語學研究所保存のものである。

- (1) L. de Rosny, *Résumé des principales connaissances nécessaires pour l'étude de la langue japonaise*, Paris, 1854
- (2) *Remarques sur quelques dictionnaires japonais*, Paris, 1858

- (3) Manuel de la lecture japonaise, Amsterdam, 1859
- (4) Notice d'un vocabulaire pharmaceutique hollandais-japonais, Paris, 1860
- (5) Notices sur les îles de l'Asie orientale, Paris, 1861
- (6) Rapport sur le Dictionnaire japonais-russe de M. Gochkiévitch, St. Petersbourg, 1861 日本文集
- (7) Vocabulaire Chinois-Coreen-Aino expliqué en français et précédé d'une Introduction sur les écritures de la Chine et de Yéso, Paris, 1861
- (8) L'Empire japonais et les archives de M. de Siebold, Paris, 1862
- (9) Des Affinités du japonais avec certaines langues du continent asiatique, (Actes de la Société d'Ethnographie, No. 9) 1861
- (10) Recueil de textes japonais, Paris, 1863
- (11) 漢文小引, 巴里, 一八六四
- (12) Discours prononcé à l'ouverture du cours de Japonais à l'école impériale et spéciale des langues orientales Paris, 1863.
- (13) Exercices de Lecture japonaise, Paris, 1863 カタカナ伊呂波誦習
- (14) Dictionnaire des signes idéographiques de la Chine avec leur prononciation usitée en Chine et au Japon et leur explication en français, Paris, 1864 和漢字洋譯
- (15) Etudes asiatiques de géographie et d'histoire, Paris, 1864
- (16) Grammaire japonaise, 2e éd. Paris, 1865 日本語考
- (17) Thèmes faciles et gradués pour l'étude de la langue japonaise, Paris, 1869 初學佛語梯

- (18) Observations sur la transcription des sons étrangers et sur l'alphabet international linguistique, Paris, 1870
- (19) Anthologie japonaise, poésies anciennes et modernes, Paris, 1871 詩歌撰要  
Le Lotus, No. 1—3, 1873 蓮花
- (20) Eléments de la grammaire japonaise (langue vulgaire), Paris, 1873
- (21) L'écriture archaïque des Japonais, Paris, 1873
- (22) Manuel du style épistolaire et du style diplomatique, Paris, 1874 東學所用文章
- (23) Extraits des historise du Japon, Paris, 1874 史傳雜集
- (24) 太閤記 Tai-kau Ki, Histoire populaire de Tai-kau Sama, Paris, 1875
- (25) 實語教童子教 Zitu-Go Kyau -Do-Zi Kyau. L'enseignement de la vérité, ouvrage du philosophe Kôboudaisi, et l'enseignement de la jeunesse, Paris, 1876
- (26) Les distiques populaires du Nippon, extraits du Gi-retu Hyaku-nin is-syu, Paris, 1878
- (27) Les successeurs de Zin-mu jusqu'à l'époque de la guerre de Corée, Paris, 1880
- (28) Guide de la conversation japonaise, Paris, 1883
- (29) Catalogue de la bibliothèque japonaise de Nordenskiöld, Paris, 1883
- (30) Premières notions de langue japonaise, Paris, 1884
- (31) Comment furent écrits les plus anciens monuments de la littérature japonaise, Paris, 1885
- (32) Les Coréens, aperçu ethnographique et historique, Paris, 1886
- (33) Le Livre canonique de l'Antiquite Japonaise. Syo-ki. (書紀) Paris, 1887

- (34) Morceaux choisis en sino-japonais, Paris, 1888 日本片假名文, 松波正信書
- (35) Versions faciles et gradués en langue japonaise vulgaire, Paris, 1889 始學日本安文
- (36) Le Taoïsme, Paris, 1892
- (37) Le Couvent du Dragon Vert. Drame japonais adapté à la scène française Paris, 1893
- (38) Eléments de la grammaire japonaise (langue vulgaire), Paris, 1897
- (39) Feuilles de Momidzi, études sur l'histoire, la littérature, les sciences et les Arts des Japonais, Paris, 1902
- (40) Furet, le P., Lettres à M. Léon de Rosny sur l'Archipel japonais et la Tartarie orientale, Paris, 1860
- (41) Congrès international des Orientalistes, Compte-rendu de la Première session, Paris-1873 Paris, 1874
- (42) 覆刻「世のうはさ」Yo-no ouwasa, journal japonais de Paris, 1870 世のうはさ解題 昭和九年 明治文化研究會編, 書物展望社刊

註一、「慶應四年三月十二日發行「公私雜報」第十二號を見ると、「薩公權を専らにする兆を佛國より豫じめ忠告せし書翰」と題して、日本外國局宛チャルレ・デ・ラバルドの建言が掲載されてゐるが、それには羅尼閣と署してある。」(前掲蛸原八郎氏「レオン・ド・ロニー傳」十八頁)此中のチャルレ・デ・ラバルドが此人に該當するらしい。

二、當時活躍したエジプト學者で學士院會員であつたエドム・フランソア・ジヨマルのことと思ふがその歿年が一八六二年であり、後出の一八六五年の文書に同人の署名があるので暫く疑ひを存しておく。

三、ロニーが使節關係の事務に従事してゐた證據に次の記事がある。

三月十日 滯館す我國外國事務執政よりの書翰外國奉行支配同心井通辯の者附添佛國の政官に至り相渡す報書に我國の文法を以差出す其書に羅尼名とあり外國事務執政セケレタルヘルテシ名外國事務執政の大官ナビリン名と記す茲に告白するに和文を

言もの二人在りと云其一人は則囉尼なるよし（歐行記二、一八四—一八五頁、〔遺外使節日記纂輯三〕）

四、野村教授「福澤先生とレオン・ド・ロニイ」十、十一頁

五、拙稿「福澤先生と巴里」史學十三卷三號六四・一・一八頁

六、福地氏の「懷往事談」に「歐洲文明の事物を案内に應じて盡く見聞したれども大抵は無心にて見過し心に留めたるは三十餘人中にて僅々數人に外ならざりければ其歸國の曉に及びても歐洲巡廻の功績は直接にも間接にも顯はるゝ所なかりき。」（七七頁）とある。

七、石川舜台、小野彌一の兩人である。

八、拙稿「佛人の見たる福澤先生」史學十三卷四號二四・五〇頁

九、Ethnographie des peuples étrangers à la Chine, tr. de Ma-Fouan-Lin (1871)

（本篇の起草に當つては本塾講師河北展生氏の助力を得た。記して好意を謝する。）

## 福澤諭吉書翰

——後藤象二郎宛、全集未収録——

「伯爵後藤象二郎」（大町桂月著七七頁）に、續福澤全集未収録の後藤宛の福澤書翰の寫眞が掲載されて居る。書翰は左の如くである。

安岡氏之來信御示し被下難有奉存候。則返上仕候、何れ不

日拜趨萬々御話可仕奉存候。右拜答のみ申上度勿々頓首

九月初一

諭吉

後藤先生

御侍史

同書の説明には明治二十八年の書翰とされて居る、封筒が同時に寫されて居るから、年代は多分封筒の消印に依つたものと思はれる。文中安岡とあるは、安岡雄吉の事であらう。安岡の書翰の内容は勿論知り得ないが、丁度後藤を中心に政友有志會を組織して居た際で、後藤と藏相を辭した松方と、改進黨の大隅との提携が行はれようとして居た際であるから、或は此の邊の事に關するものではなかつたらうか。（河北展生記）